

令和 4 年 5 月 21 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00018

研究課題名(和文)クオリアの反自然主義に最適な知覚理論としての直接知覚説の可能性

研究課題名(英文)The possibility of direct perception theory as the optimal perception theory for anti-naturalism of qualia

研究代表者

金杉 武司(Kanasugi, Takeshi)

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：00407660

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、以下の点を明らかにした。

(1)クオリアの反自然主義の立場にとって最適な存在論的理論は、クオリアを、有視点的存在でありながら、世界の側の事物が持つ客観的な性質として位置づける素朴实在論であり、知識論証はまさにそれを示すがゆえに最適な反自然主義的議論である。(2)(1)の存在論的理論と最も適合する知覚の哲学理論は、(1)のようなクオリアが知覚や感覚において直に与えられているとする多面説的直接知覚説である。(3)(2)の多面説的直接知覚説は、選言説と結びつくことにより、センスデータ説・副詞説・志向説といった他の知覚理論よりも優れた説明力を持つことができ、それゆえ最良の知覚理論である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)本研究の成果は、クオリアの哲学や知覚の哲学において新しい知見をもたらすのみならず、自然主義の世界観と反自然主義的世界観の対立というより大きな文脈において、反自然主義の最も強力な体系的存在論的理論を構築するための土台をつくると考えられる。(2)自然主義的な一元化の傾向が益々強まってきている現代において、反自然主義の考えを最も強力なものにすることで自然主義の妥当性を改めて問うことは、方法論的自然主義と存在論的自然主義の関係を改めて問うことに繋がり、延いては、哲学とはどのような知的営みであるのか、そもそも人間の知的営みとは一体何なのかという究極的な哲学的問いに繋がるとも考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study argued the following points.

(1) The best ontological theory for the anti-naturalist position of qualia is naive realism, which locates qualia as such that they are objective properties of things on the side of the world, even though being perspectival entities, and the knowledge argument is the best anti-naturalist argument because it shows exactly this. (2) The philosophical theory of perception that best fits the ontological theory of (1) is the multi-aspectistic direct perception theory, which holds that qualia such as in (1) are directly given in perception and sensation. (3) The multi-aspectistic direct perception theory in (2), when combined with the disjunctivism, can have better explanatory power than other theories of perception such as the sense-datum theory, the adverbial theory, and the intentional theory, and is therefore the best theory of perception.

研究分野：哲学(分析哲学、心の哲学、メタ倫理学)

キーワード：クオリア 素朴实在論 直接知覚説 反自然主義 多元的实在論 視点 最良の説明への推論 選言説

1. 研究開始当初の背景

(1)心の哲学の一分野であるクオリア(意識)の哲学では、20世紀後半以降、知覚や感覚における質的な現れとしての「クオリア」の自然化、つまり、クオリアを自然科学的な秩序の中に位置づけることが可能かどうかを巡り盛んに議論が展開されている。そこでは、自然化可能とする自然主義はクオリアを心の状態の志向的性質とする「志向説」と対応づけられ、他方、自然化不可能とする反自然主義はクオリアを心の状態の内在的性質とする「内在説」と対応づけられる傾向が強く、クオリアを世界の側の事物の客観的性質とする「素朴实在論」は自然主義・反自然主義いずれの存在論的理論としても十分に検討されていない(素朴实在論が十分に検討されないという点は、D・C・デネット、N・ブロック、G・ハーマン、T・クレイン、信原幸弘といった国外・国内の代表的な論者に共通する)。

(2)しかし、反自然主義の議論の核心は、クオリアが「視点」に依存した有視点的(視点内在的)な存在であることにあり、この有視点性を最も的確に捉えることができるのは、(1)の素朴实在論に他ならないと考えられる(この「有視点性」が(1)で言う「客観性」といかにして両立可能であるかという点ももちろん、そこで説明されるべき問題の一部である)。

(3)他方、同じく心の哲学の一分野である知覚の哲学では、20世紀後半以降、知覚を、心的な対象との関係とする「センスデータ説」、世界の側の事物やその性質との関係とする「直接知覚説」、いかなる対象との関係でもなく心的状態の内在的な変容とする「副詞説」、同じく関係ではなく心的な表象状態とする「志向説」のいずれが適切な知覚理論であるかが専ら論じられ、それらの知覚理論とクオリアの自然化可能性の関係は十分に検討されていない(たとえばW・フィッシュ『知覚の哲学入門』勁草書房、2014年)や *Stanford Encyclopedia of Philosophy* の The Problem of Perception の項目などでも論じられていない)。

(4)しかし、知覚の副詞説はクオリアの内在説、知覚の志向説はクオリアの志向説、直接知覚説はクオリアの素朴实在論と密接な関係にあり、直接知覚説は、クオリアに関する反自然主義的な素朴实在論にとって最適な知覚理論であると考えられる。

(5)それゆえ、本研究代表者は、研究開始当初において、素朴实在論がクオリアの反自然主義にとって最適な存在論的理論である可能性や、直接知覚説がクオリアの反自然主義にとって最適な知覚理論である可能性について検討することには、学術的な独自性があると考え、以下の研究の目的を設定した。

2. 研究の目的

(1)本研究は、クオリアの反自然主義にとって最適な知覚理論としての直接知覚説が十分に妥当性を持つ哲学理論であること、詳しくは以下の仮説 ~ が妥当であることの論証を目的とした。

クオリアの反自然主義の立場にとって最適な存在論的理論は、クオリアを、有視点的(視点内在的)存在でありながら、世界の側の事物が持つ客観的な性質として位置づける素朴实在論である。

そのようなクオリアの存在論的理論と最も適合する知覚の哲学理論は、 のように位置づけられるクオリアが知覚や感覚において直に与えられているとする直接知覚説である。

のような直接知覚説は、知覚理論として、センスデータ説・副詞説・志向説といった他の知覚理論に比べても十分に妥当性を持つ。

(2)また本研究は、自然主義的世界観と反自然主義的世界観の対立というより大きな文脈において、反自然主義の包括的な存在論的理論としての多元的实在論を構築するための土台をつくることも目的の一つとした。

3. 研究の方法

(1)クオリアの反自然主義を擁護する代表的な議論(クオリアの逆転や欠如などの「思考可能性論証」と、F・ジャクソンやT・ネーゲルなどによる「知識論証」)や、内在説や志向説・素朴实在論などのクオリアの存在論的理論に関する近年の議論をサーヴェイし、議論状況・争点を整理する。

(2)その上で、知識論証こそが、クオリアの有視点性を的確に捉えている点で、反自然主義にと

って本質的な議論であることを論証する。

(3)クオリアの有視点性的内実を明らかにするために、現象学的な知覚理論における志向性や射映に関する議論を参照する。

(4)そして、クオリアの有視点性を最も的確に捉えることのできる存在論的理論は、クオリアを、世界の側の事物が持つ客観的な性質として位置づける素朴实在論であることを（有視点性と客観性の両立可能性を含めて）論証する。＜「2．研究の目的」に示した仮説の妥当性の論証＞

(5)(2)(4)の論証の妥当性を高めるべく、学会発表等を通して他の研究者と議論する。またその一環として、知覚の哲学の代表的論者であり先端的研究に従事するT・クレインが所属するハンガリー・中央ヨーロッパ大学への短期滞在によって、国外の研究者とも直に議論する。

(6)センスデータ説や副詞説・志向説・直接知覚説などの知覚の哲学理論に関する近年の議論をサーヴェイし、議論状況・争点を整理する。

(7)上記(4)の素朴实在論と最も適合する知覚の哲学理論は、(4)のように位置づけられるクオリアが知覚や感覚において直に与えられているとする直接知覚説であることを論証する。＜「2．研究の目的」に示した仮説の妥当性の論証＞

(8)(7)の直接知覚説の内実をより明確にするために、「直に与えられている（面識）」とはどのようなことかを詳しく検討する。その手掛かりとして、知覚と行為の密接な関係について論じたJ・J・ギブソンの生態学的心理学やA・ノエの現象学的な知覚理論を参照する。

(9)(7)の論証の妥当性を高めるべく、学会発表等を通して他の研究者と議論する。

(10)直接知覚説と他の知覚理論の妥当性を比較するための評価方法を検討する。方法論的自然主義の妥当性を前提し、哲学的直観に訴えるだけのアプリオリな評価ではない評価方法とはどのようなものであるべきかを明確にする。

(11)(10)の評価方法の下で、直接知覚説にとって最大の問題と考えられる錯覚・幻覚の問題（錯覚論法・幻覚論法論駁の課題）に取り組み、直接知覚説が十分に妥当であることを論証する。＜「2．研究の目的」に示した仮説の妥当性の論証＞ その手掛かりとして、M・G・F・マーティンやW・フィッシュラによる選言説の議論を参照する。

(12)(11)の論証の妥当性を高めるべく、学会発表等を通して他の研究者と議論する。

4．研究成果

(1)クオリア（現象的性質）はいかにして自然的世界のうちに位置づけられうるのかという「意識のハード・プロブレム」に対して、自然主義は、現象的事実（クオリアに関する事実）を含むすべての事実がすべてのミクロ物理的事実によって必然化されているがゆえに、ハード・プロブレムは解決可能であると答える。これに対して、クオリアに関する反自然主義は、そのような必然化関係が成立することを否定し、クオリアを自然的世界のうちに位置づけることは不可能である、つまり、ハード・プロブレムは解決不可能であると主張する。本研究代表者は、自然主義を否定し、世界が自然科学によって把握可能な無視点的側面および存在者だけでなく、自然科学によっては把握不可能なさまざまな有視点的側面および存在者を持つとする「多元的（多面的）实在論」を支持しているが、本研究では「意識のハード・プロブレム」に関して、以下のようにして、クオリアがそのような有視点的な存在者の一つであるという見解を擁護することを試みた。まず、クオリアに関する反自然主義を擁護する議論にはいくつかの有名な議論があるが、その中でも「知識論証」は、クオリアが有視点的な存在者であることを強く示唆する点で、以上の見解を擁護するのに最も適切な議論であることを示した。そして、知識論証を擁護することを試みた。知識論証は、他の反自然主義擁護論と同様に、これまで多くの反論に晒されてきた。本研究では、その中でも特に強力な反論である「新知識／旧事実の見方」、「現象的概念戦略」および「指標的知識との類比に訴える反論」の三つを取り上げ、それらの妥当性を検討した。そして、それらの反論がいずれも知識論証の妥当性を否定するには不十分であることを示し、ハード・プロブレムが解決不可能であるのはクオリアが有視点的な存在者であるがゆえのことであり、知識論証はまさにその点を明らかにする議論であるということを示した。

(2)知覚の日常的理解の諸側面は互いに矛盾していると考えられる。そのような諸側面とは、真正な知覚経験とは外的な世界の日常的な事物やその性質の、知覚主体に対する現前化であるとする「素朴实在論」、どの真正な知覚にも、それとは主観的に識別不可能な真正でない知覚経験が存在しうるとする「識別不可能性の見方」、主観的に識別不可能な真正な知覚と真正で

ない知覚は、共通の基礎的な心的状態を含むとする「共通要素原理」の三つである。この矛盾は「知覚の問題」と呼ばれる。本研究では、この「知覚の問題」を解消しようとする知覚の哲学的諸理論を、知覚の日常的理解のある側面を前提として、知覚とは何かという問いに答えることを試みるものとして捉え、それらがさらに、何らかの補助仮説とともに日常的理解の他の側面を整合的に説明しようとする一方で、「知覚の問題」を解消するために、衝突する諸側面のうちの少なくとも一つを否定するということを確認した。代表的な理論であるセンスデータ説、副詞説、志向説はいずれも、共通要素原理を前提して、それぞれ異なる仕方で識別不可能性の見方を説明しようとする一方で、矛盾を解消するために素朴实在論を否定する。それに対して直接知覚説は、素朴实在論を前提して他の側面を説明しようとする一方で、矛盾を解消するために共通要素原理を否定する。本研究は、哲学的理論が一般に説明を目的とするものである以上、それは最良の説明への推論の評価基準である、単純性、整合性、テスト可能性、包括性の基準を満たすべきであると論じた。そして、知覚の哲学的諸理論の評価においては、包括性基準を満たすかどうかが決定的になる。本研究では、以上の観点から見ると、素朴实在論は知覚の日常的理解の「より深い」部分を成すがゆえに、素朴实在論を否定する理論は、われわれが素朴实在論を信じがちなのはなぜであるかを説明しなければならないが、そのような理論はいずれもその点に成功していないということを示した。他方で、共通要素原理は識別不可能性の見方の自然な説明であるがゆえに、共通要素原理を否定する直接知覚説は、この見方についての代替りの説明を提示する必要があると考えられた。本研究は、これこそが、直接知覚説が最良の理論であるために取り組まなければならない課題であるということを確認した。

(3)本研究では最後に、素朴实在論を支持する直接知覚説が、以下のように、識別不可能性の成立を説明できるということを示すことによって、直接知覚説が「最良の説明への推論」の評価基準を最も良く満たす最良の哲学的知覚理論であるということを示した。本研究ではまず、素朴实在論を支持する直接知覚説は共通要素原理を認めることができないため、識別不可能性を説明するためには、真正でない知覚が真正な知覚と共通の認知的結果を持つという選言説的説明に訴える必要があるということを確認した。しかし、この説明には、真正でない知覚における性質の現前化や現実感(現象的性格)に関する説明が欠けている。これに対して本研究では、以下のような点を主張することによってこれを補うことができると論じた。それは、 実在の世界に存在する無視点的な性質は多面的なものであり、さまざまな側面(すなわち有視点的性質)を持つという点、 知覚において有視点的な性質が現前化するときにはつねに、その背景として何らかの無視点的性質も現前化するという点、 真正な知覚の現実感はいずれも有視点的性質や無視点的性質の現前化によって少なくとも部分的に説明されるという点、 主体の適切な感覚運動的な諸技能が有視点的性質と無視点的性質の現前化を可能にする条件の一つであるという点、 真正でない知覚では、主体に現前化しているように思われている有視点的性質や無視点的性質のすべて(幻覚の場合)もしくは一部(錯覚の場合)が実際には現前化していないが、その主体は関連する感覚運動的な諸技能を行使する態勢にあるがゆえに、真正でない知覚にも、それらの技能に関連する弱い形での現実感があると言えるという点である。本研究では、以上の点を唱える直接知覚説を「多面説的直接知覚説」と呼び、この多面説的直接知覚説こそが、最良の理論であると結論づけた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 金杉武司	4. 巻 120(9)
2. 論文標題 道徳の自然化と反自然主義的な道徳的実在論の一つの可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 15-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Kanasugi	4. 巻 59
2. 論文標題 The Hard Problem of Consciousness and the Perspectivalness of Phenomenal Properties	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 國學院大學紀要 (Transactions of Kokugakuin University)	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Kanasugi	4. 巻 122(4)
2. 論文標題 An Assessment of the Philosophical Theories of Perception and the Issues the Direct Perception Theory Needs to Address	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 國學院雑誌 (The Journal of Kokugakuin University)	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Kanasugi	4. 巻 123(4)
2. 論文標題 An Explanation of Hallucination and Illusion by the Direct Perception Theory	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 國學院雑誌 (The Journal of Kokugakuin University)	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

【研究会での研究発表】

- (1) 金杉武司「規則のパラドクスに関する野矢の論考について」, ア・プリアリ研究会(オンライン開催), 2020年3月20日.
- (2) Takeshi Kanasugi, The Perspectivity of Phenomenal Properties, 第4回英語・哲学研究会(オンライン開催), 2020年6月27日.
- (3) 金杉武司「知覚の哲学的理論の評価と直接知覚説が取り組むべき課題」, ア・プリアリ研究会(オンライン開催), 2020年11月15日.
- (4) 金杉武司「幻覚と錯覚の説明」, ア・プリアリ研究会(オンライン開催), 2021年1月10日.
- (5) 金杉武司「『哲学入門』(仮題)の検討」, ア・プリアリ研究会(オンライン開催), 2021年9月4日.
- (6) 金杉武司「規則のパラドクスに関する野矢の論考について(再)」, ア・プリアリ研究会(オンライン開催), 2022年2月26日.

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------